自分でつくる もう一つのしごと

「好きが軸となる」貴方なりの複業を

山と道 × うみの図工室　木村 弘樹さん

最近よく耳にする「複業」という言葉。社会の変化や価値観の移ろいによって、複数の生業を持つ働き方を始める人が増えている。一言に「複業」と言ってもその形は様々だが、複業を実践している人のストーリーに触れることで、自分に置き換えられる気づきがきっとあるはず。

そこで今回は、鎌倉の山道具メーカー『山と道』で働きながら、逗子の子ども向けものづくり教室『うみの図工室』を主宰し、さらに遊びと暮らしをつくる地縁コミュニティ『そっか』のイベント企画まで幅広く活動している、木村弘樹さんにお話を伺った。地域に根差しながら教育や自然をテーマに持続可能な形で循環していく、SDGsの側面を併せ持った彼の複業の形を探る。

「好き」や「興味」が軸にある、自然体の複業

木村さんは複業という働き方を選ぶことで、自分の「好き」や「興味」に正直に向き合ってきた。元々は、『LITALICOワンダー』という子ども向けものづくり教室で店舗立ち上げやイベント企画、エリアマネージメントなどの仕事をしていた木村さんだが、一方で心の中には常にアウトドア業界への関心も共存していたと言う。「旅好きの父の影響もあり、学生時代にはネパールのヒマラヤトレッキングや、南米の砂漠250kmを荷物を背負いながら7日間で走る砂漠マラソンなど、旅というものに傾倒していて。その流れでいつかアウトドアの仕事にも携わりたいなと思っていたんです」。そんな彼はいつしか、住まいのすぐ近くに海や山がある暮らしに惹かれ、逗子に拠点を移すことになる。

そうしてこの街で自然と隣り合わせの暮らしを楽しんでいた彼に、2年前、二つのご縁が訪れる。そのひとつが、ハイキングの道具を作り、ハイキングのカルチャーを広める『山と道』に出合い、自身の人生と重なる部分を感じて転職したことである。「この会社で働く中で、山を自由に旅をするための道具の選択や方法を学ばせてもらっています。その学びが、今の複業の土台にもなっているんです」と、彼は話す。現在、『山と道』では全国のアンバサダーやイベントディレクターと連携したイベント運営や情報発信、オンラインショップの発送管理、製品ページのモデルなど、様々な役割を担っている。

そしてもうひとつのご縁が、逗子の『そっか』で子どもたちと自然の中で遊ぶ企画を実行する中で、物件を紹介していただき『うみの図工室』を立ち上げるきっかけとなったことである。

「オーナーのお子さんが『そっか』に通われていて、その繋がりでこの場所を使ってみないかと。逗子は自然の中で体を動かす環境やコミュニティに恵まれているけど、子どもがものづくりの文脈で個性を発揮できる場所もあると良いなと思ったんです」。そしてこの場所で、前職で一緒に働いていた山村風子さんと共に『うみの図工室』を立ち上げた。3Dプリンタを活用したデジタル工作やプログラミング教室、一人ひとりが思う海の色を自由に描く造形ワークショップなどを開催し、現在はオンラインも導入しながら活動している。

こうして彼の複業は、無理のない自然体な形で始まった。

シームレスに循環していく、ご縁と仕事

「複業をしようと思っていたのではなくて、人生で選んできた『自然』と『ものづくり』の延長線が交差するところに、複業というスタイルがあっただけで。だから、仕事なのかプライベートなのか分からないくらい楽しんでやっています」と、彼は笑う。

そんな彼が複業に繋がるご縁を手繰り寄せることが出来たのは、自分の「好き」や「興味」という軸を持ちながら、外の世界に飛び込み一期一会を大切にしてきたからに他ならない。「振り返るとこの街とのご縁も、前職の時に逗子の『原っぱ大学』のフィールドを借りて、山の中でレゴでロボットを作るという企画をやらせてもらったことがきっかけでした」。頭でっかちになっていつまでも動かないのではなく、自分が見たい世界を共有しながら人と関わりとにかく実行してみる。外のフィールドやコミュニティに積極的に参加していくその積み重ねが、ご縁を引き寄せることに繋がっていく。

そんな形で生まれた『原っぱ大学』